

高等学校美術教育におけるオンライン授業の試行 —オンライン授業は、教師・生徒・学びの場の関係性を補填することが可能だろうか—

A Trial of Online Learning method in High School Art Education :
Teachers, Students and Learning place of school education.
To maintain this relationship. Can we use "Online Learning method" well?

高橋 承 一
TAKAHASHI Shoichi

In Japan, Schools were closed nationwide by the government from March 2nd to May 31st 2020 to curb the spread of COVID-19 infection. Schools reopened in June. What we did to prevent infection was "social distance" and "avoidance of the Three Cs". It was called the "new lifestyle". And we had to make it a habit. In the future, these habits will also affect people's relationships with others and their sense of psychological distance from others.

However, such learning place with a sense of distance and division is different from the "learning place" that has been respected in Japanese school education. Schools are made up of three elements. It is Teachers and Students and Learning place.

Learning place is a place for teachers and students. But It is closed under the corona wreck. And will online lessons help teachers and students make up for this situation? I want to think from practice.

はじめに

世界各地で爆発的に感染を広げた新型コロナウイルスは 100 万人以上の死者を出し、2020 年 11 月現在、再び第 2 波の感染が広がろうとしている。日本では、突然の閉校が昨年度 2 月 27 日から 3 か月間にわたり余儀なくされた。学校現場では学年末の学習指導や休校中の学習補償もできていないまま学校は閉鎖された。年度を横断した閉校は、新入生、在校生の新たな学校生活への期待感や感動、気持ちの切り替えといった節目のけじめや覚悟が削がれたまま 6 月に新学期を迎えた。学校は再開され、感染防止のソーシャルディスタンス（社会的距離の確保）、三密の回避というような幾つかの具体的な手立てが実施され、「新しい生活様式」として定着されようとしている。それは今後、人と人との心理的距離感や関わり方にも表れてくるのであろう。

このような距離感、分断感は、今まで日本の学校が大切にしてきた学びの場とは逆のものである。学校教育は物理的・心理的に人と人が密な環境の中で行われ、生徒と教師、生徒間、教師間の人間的な信頼関係を築いた相互扶助の風土の中から教育成果を上げてきたとも言える。それを現在のコロ

ナ禍における様々な現象が学びの場や、生徒と教師の学びの距離感というものに異変をもたらし始めていると言えないだろうか。そういった中で Zoom や Teams 等の ICT を活用したオンライン授業がクローズアップされ急速に現場への環境整備が進められている。

教師・生徒・学びの場、学校教育が持つこの関係を維持させるためにオンライン授業はこの関係を補填することができるだろうか。“学びを止めない”手だてとして試みたオンライン授業の実践から考えてみたい。

オンライン授業1「授業ガイダンス」 2020年5月11日10:00～11:20 20名参加

【授業内容】

- ① Zoom 各機能の使い方を知る。
- ② オンライン授業上のルールの確認をする。
[発言したい時・する時] [合図する時] [ほめる時] [作品の示し方] [スマホの机上への設置方法]
[質問する時]
- ③ オンライン授業と通常の授業とでは何が違うのかを考える (PP 使用)。
- ④ 校内の様子を中継で見る (授業を実施する総合学科棟展示風景等)。
- ⑤ Zoom 各機能の操作練習をする。
- ⑥ 次回の予定、内容を知る。



■授業初日。この時点では校内ネットワーク環境が十分ではなく、スマートフォンのテザリング機能を使用してオンライン授業を実施した。(筆者撮影)

生徒達はスマートフォンの画面上でお互いの顔を確認し、休校前の日常が画面に再現されて素直に嬉しかったようだ。モニター内の仕切られた小さな枠の中からこちらを覗いている一人一人が確認できる。マイクとチャットを通して注意深くやり取りが続く。コロナ禍以前を振り返れば、授業の中で誰に向かって話し、何をやりとりしてきたのだろうか。生徒ではなく教師は自分に向けて授業の内容を言い聞かせていたのかもしれない。制作の日程や完成を急がせることばかりに囚われて制作を通して何を育てたいのか、何を実感させたかったのかを曖昧にしてこなかったか。このことは生徒達も同様に気づいていたことだった。授業の感想を読むと、休校で生活が変わり自宅に閉じ

こもっていることへの不安やオンライン授業への戸惑い、学校への思いが伝わってくる。しかし何よりも生徒達がワクワクしていたのが初回の成果だろう。

【生徒の感想】

- ・オンライン授業を受けてみて、慣れない操作に苦戦することも多かったのですが、久しぶりに学校やみんなの様子が見ることができて嬉しかったです。明日から毎日授業があるので、一回ずつを無駄にしないように頑張っていこうと思います。
- ・相手は画面にしかなくて、絶妙な距離感にすごく緊張します。普段のように面と向かって話すよりも喋るのに勇気がいらいます。スマホだと画面が小さくて、みんなの顔を一度に見ることが出来ない（マイクが音をひろった人の画面に強制的に変わってしまう）みたいでした。意見を聞いてて、私も頑張らなきゃとシャキッとされたように思います。明日から始まるので、曜日感覚も戻ってきそうで少し嬉しいです。緊張しないように自然に楽しめるようになりたいです。
- ・久々に皆の顔を見て元気そうで何よりでした。また、学校に自分たちの描いた自画像が展示してあり、まるで美術館みたいだなと思いました。学校に行きたくなくなってしまいました。早く皆とも会いたいです。
- ・自粛期間中、家族以外と喋ることが無かったため、少しずつ慣れてきてしまい1日をぼーっと過ごしていました。久しぶりに声を聞き、他の人の課題を見て自分と比較することで、気を引き締めることが出来ました。明日から前向きに取り組めそうです。
- ・今年の春をみんなと過ごせないまま夏を迎えようとしています。こんなにも学校や友達や先生と過ごす時間、学びの時間が尊いものだと思いませんでした。みんなと話せる短い時間を大切にしたいです。
- ・遠隔授業はわくわくしました。久々に制服のシャツに袖を通しました、メリハリがつけられて良かったと思います。Zoom中の自分の背景や、いつも話す時には見えない喋っている自分の顔が気になってスリルを感じました。
- ・操作になれず、音が出ないトラブルがあり大変でした。慣れていくには時間が掛かりそうです。久しぶりに学校の中を見る事が出来て嬉しくなりました。新鮮で珍しかったです。教室で受けるときは皆前を向いて顔を見合わせて授業をすることがあまりない気がするので、特殊な風景だなと思いました。
- ・みんなが画面の向こうで動いて話しているのが面白かったです。スマートフォンはすごく便利だなと思いました。画面の向こうからだったけどみんなに会えてうれしかった



■ Windows10のマルチスクリーン機能を利用すれば、画面の情報を2つに分けて2台のモニターの役割を分けることができる (筆者撮影)

たです。こんなにも学校に行かないのは、初めてなのではやく学校へ行きたいです。

- ・顔や部屋の一部を公開？することに妙な気恥ずかしさを感じると同時に、皆さんがあまり変わらないようで安堵しました。不規則な生活を送っているのでリズムを整え、集中して取り組んでいきたいです。相手は画面にしかいなくて、お互いに顔を見れる状態にあるので、距離感にすぐく緊張します。

オンライン授業2「眼のデッサン」振り返り1

2020年5月12日10:00～11:20 24名参加

【授業内容】

休校課題：「眼のデッサン」（鏡を観察し、眼と周辺を鉛筆でデッサン。目の幅を拡大して描く。）

- ①生徒はWEB掲示板に作品画像、制作コメントをアップロードし、それに対して教師はコメントを書き込む。（生徒はこの段階まで参照済み）
- ②教師は、作品・生徒コメント・教師コメントを一覧に加工し、授業で生徒が閲覧できるように授業準備。
- ③生徒個々に制作を振り返り、教師からの助言を受けた後、オンライン授業に臨む。

＜オンライン授業時＞

抽出作品Aを共有画面に示し作者がコメント→他生徒からの感想・質問→作者回答→抽出作品Bを示し作者がコメント→A，B比較しての発言を他生徒に促す・・・発言と作品をリレーしながら授業を展開する。

遅刻してZoom上に入れない生徒、共有画面のon・off、ホスト権限の切り替え等は補助の教員で対応した。授業者は授業に集中することができたが、それでも生徒には見えていないモニターを指さし、あれこれ指示をしてしまう。カメラの向こう側の生徒を想像しながら対応の仕方を工夫しなくてはいけない。40分の制限時間（無料版）では収まらないため、一旦終了し、全員で再度ログインし授業を継続した。

【生徒の感想】

- ・初めてのオンライン授業で少し緊張しましたし、声だけならまだしも顔や部屋の一部を公開？することに妙な気恥ずかしさを感じる。不規則な生活を送っているので生活リズムを整え、集中して取り組んでいきたいです。
- ・リモート授業なのに、教室で講評しているような臨場感があり、ドキドキしながら聞いていました。皆のデッサンを見て、新たな課題を見つけることができました。
気持ちや思い切りで描くのはなく、よく観察して頭で考えながら「らしさ」をもっと追求していきたいと思います。
- ・皆のデッサンを見て、聞いて、自分に足りないところや課題が見えてとても勉強になりました。今回は画面越しからデッサンをみていて細かいところまであまり見えなかったので学校再開した時

オンライン授業3「眼のデッサン」振り返り2

2020年5月13日 10:00～11:20 24名参加

【授業内容】

2度目の振り返りは、個々の生徒作品に対して講評を行うということではなく、生徒相互の感想や意見のやり取りを教師が繋ぎ渡していくことに留意した。このような生徒間の意見や感想のこすり合わせから、それぞれの感性の理解や発見、自分と重ね合わせ、つながりを感じ「おもしろい!」「わかった!」と思える。“学びの力”というものを自らが自覚していく事にもつながる。そして何よりもこの他者と共有された時間が“楽しい”のである。

【生徒の感想】

- ・今日も目のデッサンの講評でしたが、やはり実物でないというのが最大の欠点ですね。改めて絵画などを美術館に行ってみる、ということの大切さに気付かされます。
- ・前回の授業での“参加する＝出席する ではない”という言葉を思い出して、どうにか発言出来たら良いなと思っていました。結果的に感想は少しゴチャっとしてしまいましたが、手を挙げて発言出来たことは成長だなあと嬉しく思えました。

オンライン授業4「鑑賞」1 「サン・ラザールの駅裏」アンリ・カルティエ＝ブレッソン

2020年5月14日 10:00～11:20 21名参加

授業前日、LINE上の授業グループに鑑賞作品の画像と「問い」を示し、個々で感想や考えた事を整理して授業の準備をするように指示。

【問】写真の歴史上最も重要な作品の一つです。この写真を穴が空くほど鑑賞、観察、凝視して「何を撮ろうとした写真か」について言葉でまとめなさい。

<手がかり>

ここで何が起きていますか？何が写っていますか？最初、何に目がとまった？何をしている場面ですか？そのように感じたのはなぜですか？

この写真に写っている全てのものについて言葉で説明してみなさい。

【授業内容】

作品を観ての第一印象、最初に見えたものを全員が順に発言した。

「荒れている、暗い、怖い」「中間にある柵に不自由さ」「現実感がない、隔離された世界」「戦時中？柵の向こう側が荒れている」「柵がある刑務所、人影は警察官」「疾走 走っている男」「静か、戦争が終わった、荒れ果てて倒れている」「閑散とした風景の中に人、明るくない、瞬間を切り取り時が止まった静けさ」「森の中の見世物小屋、荒れて悲しい」「閉鎖的で怖い、水に飛び込む人、一秒後の様子を思う」「不気味だが、動感、晴れた天気」「逃げている男、ジャンプ」「墓、ポスター」「人、

水面、RAILOWSKY」「男の人と反射する人」、走っている人」「バレー？ミュージカルポスター」「重そうな跳ぶ人」「奥の柵と建物」「男の後ろに倒れた梯子」「反射と奥の霧 何時なんだろう」「トリック」「色々情報が多い 風景のストーリー 何だろう」「ジャンプ、梯子、わだち、楽しそう」「色々なものが落ちている、ごちゃごちゃ感、統一感がない」「重くて貧しい、刑務所？強制労働、雲、寒い、誰かから見られている、事件が起きた」「瞬間 張りつめた感、水面じゃなく硬い地面に飛び込もうとしている」「非日常」



【図1】 アンリ・カルティエ＝ブレッソン
1932年「サン・ラザールの駅裏」¹⁾

【生徒の感想】

- ・人の意見を聞くのが好きなので、今日は皆のを見つける視点の差が面白かったです。やっぱりモノクロの落ち着いた写真のためか私と同じマイナスなイメージが多かったのが印象でした。感想の中で気になったのは、何時を考える視点でした。
- ・一つの写真にも見る人によって感じ方が全く違うんだなと思いました。こんなにも違う意見が出ていて、自分にはない考え方がたくさん聞けてとてもいい授業でした。この写真を撮った人の考え方を想像しながら見るのはとても面白かったです。
- ・他の人の意見を聞いて、最初に見た印象、目に入ってきたものでこんなに違ってくるのかと思いました。他人の意見は重要で自分の気づけなかったところ、場所や考え方、捉え方などを教えてくれる大切なものだと思えました。映っている柵から捕らわれ、強制を連想したと意見には、なるほどと思いました。
- ・写真についてのお話で、たくさん出ていたように自分もアウシュビッツとか、ベルリンの壁みたいだなと少し思いました。静か、怖いななどの感想の中に、楽しそうと言う感想があったことに驚きました。
- ・私は、高橋先生からこの写真が送られてきた時に何度も写真を見ながら思ったことを沢山書き、言いたいことは山程ありました。今日、色んな人が出してくれた意見と同じものもありましたが、まだまだ言い尽くせません。しかし、一つ、「RAILOWSKY」の意味が気になり過ぎて、調べてしまったので、よくなかったなと思いました。私は皆が純粋にこの写真を鑑賞して意見交流しているときに自分が持った意見と交えながら、新たな見方を発見しようと思います。
- ・第一印象どう思った？という質問から皆の回答で、私になるほどと思ったのはKさんやRさんが言っていた瞬間、時が止まる。というもの。写真の黒い人や後ろの文字、乱雑に置かれたものに目

が行ってしまっていて、人や物の動きには触れていなかったので関心しました。後ろの文字の意味も明日になればわかるのでしょうか。SKY と書いてあるので、明るい意味なのかな？と思うのですが、写真の雰囲気が暗いので不気味です。

オンライン授業 5 「鑑賞」 2 「サン・ラザールの駅裏」

2020年5月15日 10:00～11:20 21名参加

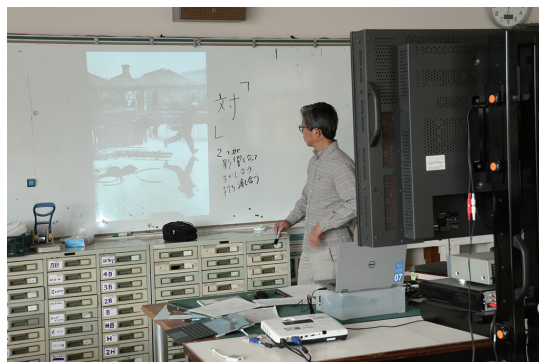
【授業内容】

前日の作品印象をもとにディスカッションを行う。

- ① 21名から希望者9名で3名×3グループを作る。
- ② オンラインで1グループ7～8分ずつ話し合う。他の生徒は聴く。教師はグループ以外の生徒にも問いを投げる。

A グループへの問い

「感じたり考えたことをもっと具体的に話してください」



■画像をホワイトボードに投影、加筆しながら“対”について解説する（筆者撮影）。

B グループへの問い

「“対”というキーワードでこの写真を見るとどう見える？」

C グループへの問い

「ブレッソンさんは、ここで何を撮ろうとしたんだろう？」

- ③ 全員に向けて写真の登場物について、画面の構造について解説をする。
- ④ 授業後、生徒はグループラインに感想を書きこむ

【生徒の感想】

- ・皆の考えをより深く聞くことが出来てとても楽しかったです。自分がふと気づいただけで言葉に出さなかったことも作品の中では意味を持つものと言う人がいて共感しながらも着眼点をそこに向けられるのが凄いと感動しました。自分が考えていたことと“対”は元々考えていたことで、そこが重要視されていることに誇らしさを感じました。しかし、自分が全く考えていなかったストーリーという新しい点を他の人を通じて知ることが出来たのでとても有意義な時間でした。鑑賞は色んな人の見方を共有出来ることがとても面白くて大好きです。この写真に写っているモノの意味はそういう事だったのか！と鳥肌が立った。水面に写るものが現実と非現実で交わり、一瞬の邂逅。日常なのにこんなに面白く撮ることが出来る。凄い。
- ・鑑賞の仕方は本当に自由なんだと感じました。「イメージが逃げていく1歩手前の瞬間」という言葉が、まさに作品にピッタリで印象的です。

- ・自分に納得がゆく発言ができました。嬉しいです。しかし、非日常と問いかけられた時、そこからの自分の感覚を言葉に伝えることができず、もっと言えたことがあったなどとディスカッションを終えて思いました。中でも、Yさんの主役がない！は同じことを思っていました。人と会ってないのに作品から考えが繋がる美術の力を改めて感じました。ものすごく面白いです。

オンライン授業 6・7「色彩和音」振り返り

2020年5月18日・19日 10:00～11:20 21名参加

〈休校中の自宅課題〉「色彩和音」1（和音：高さが異なる複数の音が同時に響く音のこと）

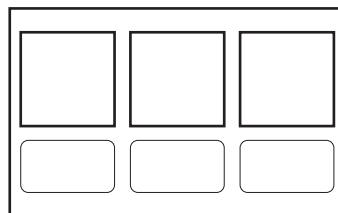
- ① 2年次課題「色遊び」で表れた色彩の中から、美しいと感じた4色の組み合わせを選びなさい。
- ② 4色を絵具を混色して作りなさい。
- ③ 配布した短冊1枚につき一色で塗り潰しなさい。短冊は10枚あるので、一色につき2～3枚の短冊を塗ります。それぞれの短冊を2cm×2cmの正方形に切り取りなさい。
ここまでが下準備です。

- ④ 4色の正方形のコマを使い、縦横それぞれ7枚分の長さの正方形を作りなさい。（49枚のコマが必要です）

テーマ：美しい色彩の響きを感じる正方形を作りなさい。

- ・4色それぞれのコマの数は自由ですが、必ず4色が入っていること。

- ・3点作り、それぞれの制作意図を書きなさい。



〈休校中の自宅課題〉「色彩和音」2

- ① ケント紙から巾2センチの短冊を2枚分切りなさい。
- ② 2年次「色遊び」で描いた色鉛筆の色彩サンプル全ての中から、あなたが「冷たい」と感じる色2色「暖かい」と感じる色2色を混色して作りなさい。
- ③ 前回課題と同じように、作った4色の絵の具を短冊に塗りなさい。（各色、均等な枚数になるようにする）
- ④ それぞれの短冊を2cm×2cmの正方形に切り取りなさい。
- ⑤ 4色の正方形のコマを使い、縦横それぞれ8枚分の長さの正方形を作りなさい。

課題：「冷たい色」と「暖かい色」の美しい対比をテーマにしなさい。

- ※ 4色それぞれのコマ数は自由ですが、必ず4色が入っていること。

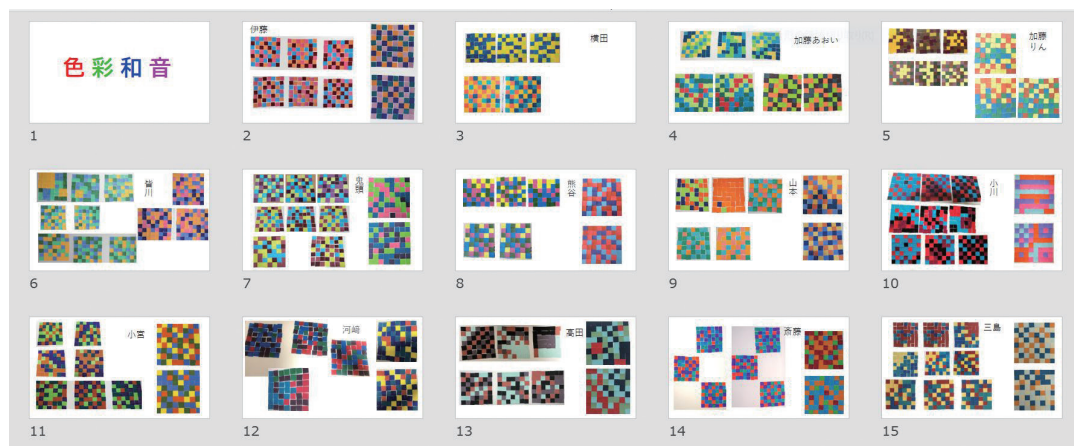
- ※ 2点制作しなさい。それぞれの制作意図を書きなさい。

【授業内容】

出来上がった色彩の振り返り。

数点の作品を示し、それぞれの制作意図に対して質問を投げかける。作者生徒からの回答をもとにして、他の生徒へも同じ質問を考えさせる。色彩に対する気づきを対話の中から引き出す。

[授業に向けての準備]



■ WEB 掲示板上に提出された自宅課題を生徒別にモニター提示できるように編集する。(モニターに映し出される画面、筆者撮影)

【生徒の感想】

- ・色について、複数の色を並べたときの関係性をみるのが大切なんだなあと思いながら聞いていました。Kさんが「色の個性を考える」と言っていたのを聞いて私には無い考え方だと感じましたし、そこまで考えられるのがすごいと思います。
- ・実際に色を並べてみて、具体的なイメージというよりは、ある程度抽象的なイメージである方が組み立てやすいのかなあと思いました。具体的なイメージを手がかりに表現しようとすると、どうしても視覚で得た情報をベースに考えがちなように感じたからです。加えて、「適度」というのも大事な言葉のような気がしました。・適度に近い色同士で色味が見えてくる・思い浮かべたイメージと適度な距離を保つなど、気持ちや視野にゆとりをもち作品にのぞむように意識したいと思いました。
- ・白色をたくさん混ぜると綺麗だが、曖昧に見えてしまうので気をつけて適度に使うのがいいのかなと思いました。自分がイメージしているものをそのまま並べるとわざとらしくなるから、はっきりとしたイメージよりなにかぼんやりした抽象的なイメージを思い浮かべて並べてみても面白いかと思いました。
- ・色と色との隣同士の組み合わせによって生まれる、新たな印象、全体を見た時の印象を考えながら配置するって、もっと色彩の知識が必要だと思いました。私はMさんの話を聞いた時に、赤と黄色を隣り合わせて並べることによって生まれた"おいしそう"という印象が、ああ、こういう事なの

かと思いました。また、ライトトーンの話聞き、綺麗でなじませそうだし、私も使いたくなりますが、曖昧に見えてしまう。色の組み合わせは奥が深く、楽しいので、もっと色々試していきたいです。

- ・私は作品を作るとき、どうしても何かをイメージしてしまう。具体的なものをイメージしないでやる事がとても難しく感じる。印象をまだ掴み取れていない。雰囲気だけで見ている。イメージだけでやっていると同じ様な配置になったり似たようなテーマになる。色選びに失敗したなど思った。色の配置の課題は苦手なので何とか掴んでいけるようになりたい。

オンライン授業8「色彩和音」制作 2020年5月20日10:00～11:20 21名参加

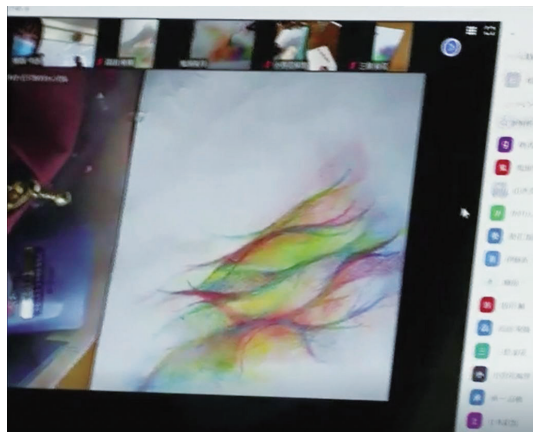
【授業内容】

制作：紅色、青、黄 の3本の色鉛筆を使い「自分の好きな曲」を色彩で表現しなさい。

- ①課題を事前に連絡し、表現意図を説明できる段階まで個々に制作を進めるよう指示。
- ②授業時、生徒はスマートフォンのカメラで作品を映しながら制作を継続する。
- ③教師はモニターから制作の様子を観察し個別に助言を加える。(今西教諭担当)
- ④授業後、生徒個々に制作を完結し、後日提出する。

【生徒の感想】

- ・それぞれ曲の感じや印象、流れ、リズムなどを具体的・抽象的に表現していて面白いなと思いました。目を閉じて自分の印象を表現してみたというT君の意見を聞き、そういうやり方もあったんだ！と驚きました。また、皆の作品を見て赤青黄の3色のみなのに色を重ねて混ぜたり強弱、タッチや勢いを変化させたりしていたので、美しかったり感情的だったり、また色彩の響き合いを表現できているのかなと思いました。
- ・皆それぞれ曲の感じや印象、流れ、リズムなどを具体的・抽象的に表現していて面白いなと思いました。目をつぶって曲の自分の印象を表現してみたというT君の意見を聞き、そういうやり方もあったんだ！と驚きました。
- ・実技内容でスマホからだ片手での作業が大変でした。自分の作品がどう写ってるのかが気になります。私は実験的に曲をリピートしながら描き進めてました。歌手の息遣いはどんな感じかと何気なく聴いてる時より注意深く聴くことも良かったのですが、さらにそこから自分の感じた思いを乗せるよう具象をイメージする理知的なやり方も取り入れたいなと授業を聞いて思いました。私の思う曲の柔らかさに密度をあげ丁寧に作り上げたいです。



■生徒たちは片手に色鉛筆で制作、もう一方の手にスマートフォン、描いている自分を撮りながら授業を受ける（筆者撮影）

- ・片手にスマホを持って描くのは大変だったけど皆の作品を見て、抽象的に描いている人と具体的に描いている人でそれぞれ自分が思ったことを絵に表していて面白いと思いました。色鉛筆で重ねたり擦ったり塗る強さを変えてみたりして色々な表現が出来て楽しかったです。3色だけでもこんなにも綺麗な色が作れるんだと驚きました。

オンライン授業9「コラージュで綴る日常」2020年5月22日10:00～11:20 21名参加

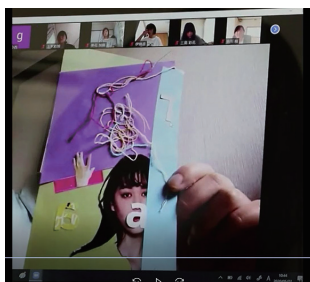
【授業内容】

制作：「日常の何気ない感情」をテーマにコラージュ制作を下さい。

- ①写真や身の周りの印刷物、色紙を貼り重ねたり、つなぎ合わせたり、並べたり、隠したり、陰をつけたりして生活の中で感じたこと、思ったこと、考えたことを表す。
- ②10作品制作する。2日に1枚制作するペースになる。

【生徒の感想】

- ・今回のコラージュの作品や、色彩の課題でもそうですが、分からないことがあると、自分だけでは分からないまままで終わってしまうのです。特にこの自粛期間の間は、周りの人の作品を全く知らない状況での制作でした。



■回を重ねるにつれて生徒、教師共に実際の教室での授業をイメージしながら進行していく (筆者撮影)

周りに影響されることがないといえよく聞かえますが、それは、自分が課題への解釈違いを起こしているときに、それを正してくれる人がいないということです。今まで授業の中でスムーズに制作できていたのは、意見を共有できる人がいたからだと感じました。学校なら当たり前でできたことを自宅でもできるようになるいい機会だったと思います。

- ・説明的ではなくて、感情そのものをぶつけるという言葉聴いて、そういうことか！と納得出来た気がします。また、みんなの作品から自分は背景をおおってしまう癖があることに気づきました。背景をおおわずにモチーフを配置している作品が魅力的にみえたので、ぜひ私もチャレンジしてみようと思います。色々と言訳を浮かべながら手を挙げずにいましたが、緊張して言訳を並べている時点であと1歩なのになあ、と喋り終わってからしみじみ思いました。もっと成長したいです。
- ・コラージュは、難しいものだと思こんでなかなか手が動かないものでした。先生が言っていたようにその時あった事を説明するのではなく、小さな感情がふっと現れるようにするための練習だと思うと腕が少し軽くなる気がします。たくさん試していきたいです。
- ・授業はどうなるんだろうと思って休みの期間を過ごしていたので少しの間だけだったけどとてもありがたかったです。学校でも先生がリモート授業の中で言っていたことをたくさん活用できるよう

手をたくさん動かしていきたいと思います。

- ・ Mさんの言った言葉にできない感情をコラージュにする、という言葉がともしっくりきました。リモート授業は意思疎通がしづらいし、周りの様子も分からないので大変なところもありました。しかし、なるほどな、と理解した瞬間の感動は日々の授業とは違った快感があるなあと思います。

おわりに

平成20年、愛知県の研究事業に手を挙げ「連携を軸にした美術教育の研究実践」に3年間、取り組んだ。その実践として愛知県立芸術大学と専用光ファイバーを介した遠隔授業を試みた。当時はハイビジョンモニターが市販されて間もない頃、何種類もの機器を使用し、美術室と大学をつないだ。事業終了後も継続し、5年間で様々な試みを行った。ネット環境とスマートフォンさえあれば簡単にそれを実現できてしまう現在（画質、音声など不十分な面はあるが）から眺めると比べ物にならない手間と時間と費用をかけた。当時、研究の中心だった小林英樹教授は「どんなに優れた機械ができて、心をどうやって通わすことができるかが、いい授業ができる一番大事なことだ」と言われ、その一点が教師と生徒達の大きな目標だった。それは機材の性能がどの様に進歩しようと常に変わらないことである。

「正直ちょっと疲れています。無気力な感じです。でも無理せず頑張りたいです」と、ある生徒は自分を励ますようにつぶやく。授業での学びは、教師に見守られ支援されているという意識を常に持つ。しかし、コロナ禍の先の見えない状況の下で教師は休校課題を課し続け、生徒達は評価の手ごたえが無いままにそれを消化していく。この繰り返しの中で学びのモラルが低下していくのを感じていた。友達との接触もなく、メリハリのない時間が過ぎていく中で、オンライン授業の取り組みは、無気力に陥りそうなモチベーションをつなぎとめる活力となったことは生徒達の授業感想を見ても明らかである。

不便なコミュニケーションの中から生徒と教師が学んだ事は「自分が話すことを他人はどの様に理解しているのだろう」という他者への想像だった。生徒の感想に「普段の授業に比べると人の顔がない分、少しだけ気持ちが軽くなるので、しゃべることを自分の課題にした」とある。制作過程でのつまずきや鑑賞時の心の動きをてらいなく他者へ伝えることへの努力がうかがわれる。生徒と教師の信頼関係を築く授業の在り方があぶり出される。このことを別の視点で捉えれば、モニター上での対話や映し出される個々の表情等の映像が授業参加者全員の脳裏に教室での授業を想像させる。図らずも「授業の本来の姿」というものを示してくれるのだ。単に機材やアプリを使いこなすことが先端的教育技術ではなく、授業の在り方をシンプルに問いかけることの中に、教育の糸口が見えてきたのである。

図版出典

1) アンリ・カルティエ＝ブレッソン、(1932年)「サン・ラザールの駅裏」『カルティエ・ブレッソンのパリ』、みすず書房、1994年

